
単品集うそ風味

runaway

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

単品集うそ風味

【Nコード】

N6322W

【作者名】

runaway

【あらすじ】

焼き鳥、ピッツア、生春巻、チゲ鍋、モツ煮込み、刺身、チャンプルー、おでんetc。食べきり単品の軽いおつまみをご用意しました。じゃなくて、読み切り単品の軽い短編集です。へんな味がするかもしれませんが。全体に短めの小ネタ話です。

01・異世界トリッパー

毎月購読している『まじかる まじつく』の最新号を手に入れた。

今月の特集は「日常脱出！ 異世界トリップのススメ」。付録としてなんと異世界トリップテンプレート集までついている。ひとつひとつのシチュエーションと封印術式がセットになっており、状況を再現して封じ込められた術を解放すれば、異世界に遊びに行けるというわけだ。

面白いのでさっそく試してみた。

VRMMORPGからログアウトできなくなったら異世界だった。

雨上がりに空が映った水溜りに踏み込むと異世界だった。

地面に開いていたマンホールに落ちると異世界だった。

突然夢の中で神様が話しかけてきたら異世界だった。

歩いていてトラックに撥ねられると異世界だった。

風呂でいい気分で居眠りしてたら異世界だった。

国境の長いトンネルを抜けると異世界だった。

マンションのドアを開けたら異世界だった。

勇者様として召喚されると異世界だった。

山で迷って人里に出たら異世界だった。

流れ星にぶつかったら異世界だった。

通り魔に刺されたら異世界だった。

夜寝て朝起きると異世界だった。

死んで転生先が異世界だった。

引越先が異世界だった。

お隣さんが異世界だった。

商店街が異世界だった。

学校が異世界だった。

家が異世界だった。

遠い世界だった。

胃世界だった。

あれこれ試して辿りついた異世界で遊んでは、冊子の後半に封じられている帰還テンプレートの術式で帰還する。

そしてさんざん異世界ライフを満喫して、いつもと同じように帰ろうとして。。

帰還の術がどれも使用済みになっていることに気付いた。

異世界トリップは、行きのパターンは多いが、帰ってくるパターンは意外に少ないのだ……。

というわけで、やむなく私はこの異世界で生きていくことになった。

こうして、もうひとつ異世界トリップテンプレート集に「異世界に行きまくって帰れなくなった」なる新たなテンプレが加わった。

……かどうか、私に知るすべはない。

01・異世界トリッパー（後書き）

トリツパ（Trippa）は、ハチノスを中心とする胃や腸の煮物。イタリア北部などで広く作られている。ハーブを少し入れた湯で、臭みを取り除きながら柔らかくなるまでこと煮、塩味の他、トマト、ニンニク、ワイン、チーズなどで味を付けることが多い。< Wikipedia「ハチノス」より引用 >

とは関係ありません。

02・悪魔の誘い

もうどうにもこうにもならなくなって、ついうっかり悪魔に頼ってしまった。

「悪魔でもなんでもいい！ 助けてくれ」

「喚んだか？」

やけくそで喚いたら、本当に悪魔が現れたのだ。

悪魔はにたりと嗤って言った。

「さあ、では契約だ。その願いを叶えるために、代償としてお前は何を差し出す？」

「くそつ、命以外ならなんでもいい！」

「承知した。では命の次に大事なものをいただこうか……」

浮かび上がった魔方陣に指を噛んで血をたらし、契約が交わされた。

悪魔はまがまがしい翼を広げ、凶悪な鉤爪を宙にかざし、雑音めいた呪文を唱えて、あっという間に願いを叶えてくれた。

無事契約が果たされると悪魔は言った。

「では代償をいただくぞ」

何を持っていかれるのかびくびくしていると。

悪魔は私がかけていた眼鏡を奪い取った！

うわあ、そいつは困る。何も見えない。

自分は極度の近眼なので、眼鏡がないと生活できないのだ。

ぼやける視界にパニックに陥った私をさんざんからかって楽しんだ後、哄笑を響かせながら悪魔は去っていった。

とるものもとりあえず近場の眼鏡店に駆け込み、新しい眼鏡を購入した。

眼鏡ができるまでの数日間には本当に不自由した。

いやあ、ひどいめに遭った。

それにしても、命の次に大事なものが、金で買えるもので助かった……。

03・周回遅れのフルデイ(前書き)

今日は4月11日です。

4月11日。しがつじゅうちちにち。 the 11th of April。

オーケー？ レデイ、ゴー！

03・周回遅れのフルデイ

忙しく過ごしているうちに、4月1日を逃してしまった。

あれほど楽しみにしていたエイプリルフル。悔しいなあ。そうこぼしたら、友人が教えてくれた。

「じゃあチャレンジする？ 周回遅れエイプリルフル」
「なんだそれ」

話によると、うそをつき損ねた人のために、4月11日にも十日遅れのエイプリルフルという設定日があるそうだ。

ただし、神のお情けによるワンチャンスなため、中途半端なうそは赦されない。

しかも10回に1回は神様の加護が効かなくて、うそが本当になっってしまうらしい。壮大なうそをついた拳句にとんでもないことになりかねない。

さらには、もともとあまり有名でもないイベントのため、周囲に失笑されて恥をかくリスクも高い。

十日遅れるぶん、成功率も10%がいいところということらしい。

聞けば聞くほど、ハイリスクローリターンだ。

さすがにそこまでしてうそをつく気にはなれないなあ。

そう言つと、友人はうなずき にやりと笑った。

「うん。だろ。」

……ってのはどつだっ？」

あっ、くそ。

やられた！

「うそかよ」

「周回遅れで年中行事なんてあるわけないじゃん……」

そのとき、突然耳鳴りがして頭の中に声が響いた。

『なかなかいいうそだったぞ。相手を完全にだましたしな』

二人で驚いて周囲を見回したが、俺たち以外の姿はない。
声は続けた。

『では11日ゆえ、判定だな　おっと、外れた。このうそは保護
されない』

「えっ……」

『じゃあ、4月11日は周回遅れエイプリルフルってことで、今
から確定な。』

やれやれ仕事が増えちゃったなあ』

妙に楽しい様子をつぶやきを最後に声は途絶えた。同時に耳鳴りも治まる。

俺と友人は顔を見合わせた。

「これもうそか……？」

「さあ……。でも今の“外れ”とか、絶対わざとだよな……」

「神様もうそ好きなのかな……」

うそなのかうそから出たまことなのか、よく分からないが。

次から4月11日のうそには、気をつけたほうがいいのかもしれない。

04・生きている乳酸菌

冷蔵庫の中にプレインヨーグルトがあったので、食べることにした。

封を切って皿に取り分け、スプーンに付いたヨーグルトを舐め取る。

そして付属の砂糖の袋を破いて、上にかけてようとしたり、そのとき。

『あなや!』

腹の中から声が聞こえた。

『同志よ、心せよ! 彼の地は悪玉菌の巣窟ぞ!』

皿のヨーグルトがざわざわと色めきたつ。

『そはいかに!? しかと承った! 我ら今より一致団結して討ち入らん!』

『あ、あの?』

眩くと、ヨーグルトは言った。

『安心召されい! みどもの手にかかれば、悪しきウェルシュ菌なぞ死したも同然! ささつ、召し上がられよ!』

『じゃあ……』

『あいや待たれい!』

ところが改めて砂糖をかけようとすると、怒られた。

『糖分はならぬ！ 敵に塩を送るようなものじゃ！ 一口はぐぐつと堪えて、きな粉にてもどもを加勢されたし！』

そう言えば、何かの健康番組で、ヨーグルトにはきな粉をかけて食べるのいいとか言っていたような気がする。乳酸菌が活性化するとかなんとか。

仕方なくきな粉をかけて、ぐりぐりとかき回した。

不味そうだなあ……。

『早う、早う増援を！ ぐおおお！』

腹の中では、先に攻め込んだヨーグルトが断末魔の悲鳴をあげている。

『準備は整えり！』

高らかな宣言と共に、ヨーグルトが鬨とぎの声をあげる。

『もはや一刻の猶予もならじ！ いざ討ち入りのとき！』

『ウエルシユ菌の牙城を陥落せよ！』

『乳酸菌、万歳！』

『万歳！』

……これ、食うの……？

05・虫食い魔法

久々に空飛ぶじゅうたんを引つ張り出してみたら、虫食いだらけになっていた。

空飛ぶじゅうたんの魔法は、じゅうたんに織り込まれた魔方陣に宿っている。こんなに穴だらけになつては、もう使えないかなあ。
一応、明らかに途切れている場所などを補修して、駄目でもともとということに乗ってみた。

「トーリ山イオキリヤ谷のマデラニ婆さんちへ」

行き先を告げると、じゅうたんが波打ち、浮き上がった。

おっ、いけるか？

しかし次の瞬間、急上昇したじゅうたんはめちゃくちゃに暴れ始めた。必死につかまっているうちに、危険な旋回を経て、ついにはきりもみ状態で地面に落ち始める。

うわー死ぬ！

ずどんと凄まじい衝撃があつたが、じゅうたんに包まれながら落ちたせいで大きな怪我はなかつたようだ。
ほうほうの体で絡まつたじゅうたんから抜け出す。

やっぱり適当なことはするもんじゃない。
頭を振つてめまいを払い、顔を上げる。

すると目の前には、壁全体に蔦がびっしり絡んだマデラニ婆さん

の家があった。

「なんだい、今の音は！」

飛び出してきた婆さんが、こちらの姿を見るなり驚いて言う。

「おや、早いね。ついさっき連絡をくれたばかりなのにもう来たのかい」

魔法糸電話で「今日行く」と連絡したのは、じゅうたんに乗る直前だった。

婆さんちは森を三つと山二つと湖を越えた先にあり、空を飛んでも半日ばかりだ。

どうやら虫食いじゅうたんの補修の際に、飛行の魔方陣がどうにかかって転移の術式に改変されてしまったらしい。

転移を封じた魔法具なんて、聞いたこともない。
偶然のものすごい奇跡ではあるけれど。

あのきりもみ落下。

帰りもこれを使う気にはなれないなあ……。

06・おつかれさん

最近、残業続きで体調を崩し気味らしく、特に肩こりがひどい。だんだん悪化して身体全体が重くなり、何もやる気になれなくなってきた。

「つかれたときは駅前の店がいいよ」

同僚に勧められ、ある日その店に行ってみた。

ビルの十三階の奥に位置するその店は、明るくて間口も広く、入りやすい雰囲気だった。ステンドグラスを窓に配した西洋風の小ぎれいな内装で、リフレクソロジーかマッサージのサロンといったところか。

案内されて奥の個室に行くと、ゆったりとした白衣姿の男が出てきた。

彼は私を見るなり言った。

「ああ、ずいぶんつかれてますねえ」

「そうなんですよ。なんだかだるくて」

「でしょうねえ、じゃあそこに寝てください」

マッサージ師らしき男は、うつぶせになった私の肩に軽く触れた。

そしていきなり私の背中を平手ではしはしと叩き始めた！

「ほら、さつさと楽になりなさい！」

「あいててててっ」

力任せの容赦ない平手打ちで、かなり痛い。

拳でやるならともかく、こんなのとてもマッサージとは思えない。

「なにするんですか……いたた！」

「えいえいやあ！」

「ぎゃあー！」

こちらの抗議を無視して私を打ちさえ続けた彼は、しばらくしてから突然叩くのをやめた。

「はい終わりました」

とんでもないへぼマッサージ師だ。

起き上がって文句を言おうとしたが、それよりも早く目の前に銀の十字架が差し出される。

「これをどうぞ」

「なんですか、これ」

「お守りです。しばらく持ち歩いてください。一応霊は落としましたが、念のため」

白衣の男はにこやかに言った。

「たくさん憑いてましたよ。」

疲れると抵抗力が弱って、どうしても憑かれやすいんですね」

言われてみれば、さっきまでのだるさが嘘のようになくなっていく。

身体も軽い。

友人に報告すると、彼女はうなずいて言った。

「うまいでしょ？」
あの除霊屋^{エクソシスト}「

06・おつかれさん（後書き）

おつかれさまでした。

07・エンドレスラブ(前書き)

「じゃあな、またね……」

「よおねえ、いやあ、よおねえ……」

07・エンドレス ラブ

「お願いです神様！ 彼を助けてください」

『対価は？』

「私の命を差し上げます」

『よかるう』

「じゃあね……よしおさん……」

「神よ、お願いです。彼女を生き返らせてください」

『対価は？』

「ぼくの命と引き換えに」

『よかるう』

「ばいばい……まちこ……」

「お願い！ 彼の、よしおの魂を呼び戻してください！」

『対価は？』

「私の魂と交換で」

『よかるう』

「さよなら……よしおさん……」

「お願いです！ まちこを、まちこを！」

『対価は？』

「ぼくの魂を持っていってくれ！」

『よかるっ』

「まちこ……きみさえ生きていてくれれば……」

「よしおさん、よしおさんをっ」

『対価は？』

「私が身代わりにつ……」

『お前、いつまでやるんだよ』

『いや、いつまで続くのかなって思ってたさ……』

「まちこおおっ」

『お、また来た……』

「よしおさんを！」

『対価は？』

「まちこを……」

『対価は？』

繰り返し×

「よしおさんを助けてっ」

『対価は？』

「……私の命……いえ、私の来世の命で引き換えられる？」

『ほう、そうきたか。』

ふむ……残念ながらいささか足りんな」

「そんな！」

『そうだな、あとひとり分は必要だ』

「じゃあ、じゃあ、よしおさんの来世も……っ」

『よかるっ』

「ごめんね、よしおさん。勝手なことして」

「いいんだ、まちこ。」

神様が言ってたよ。来世がないから、今生が永久に続くって」

「えっ、それって……」

「ぼくたちは永遠に一緒さ。まちこ」

「よしおさんっ……」

07・エンドレス ラブ（後書き）

『そんなのありかよ』

『まあ、いいだろ？ 楽しませてもらったしな』

08・近未来ファンタジーのプロローグ

増え続ける宇宙のゴミ　スペースデブリ。
耐用年数を過ぎた人工衛星の残骸や、砕け散らばった部品たち。
かつての開発の名残にして、いまや地球を覆い、人類の宇宙進出を妨げる邪魔者。

そのスペースデブリ対策の最後の切り札たる作戦が実行されることになった。

メテオインバケット
隕石落下魔法の詠唱装置を搭載した人工衛星を打ち上げ、地球周辺のデブリを意図的に衛星に墜とすのだ。

すべての準備は順調に進み、いよいよ魔法的宇宙塵掃討計画（Space Debris Magical Eraser Project）実行のときが来た。無人ロケットで打ち上げた魔道衛星SSC（Shooting Stars Collector）が無事に目的の軌道に投入されたのを確認したところで詠唱装置を起動。

やがてカメラに次々と墜落する金属片が映し出され始めた。

成功だ。

これで宇宙開発のリスクは大幅に減少する。
科学と魔法の融合が、新たな道を拓いたのだ。

だが。

人々が計算違いに気付くまで、そうかからなかった。

ありとあらゆるデブリが超高速で衛星に衝突するエネルギーは、想像を遙かに超えたのだ。

衝突エネルギーは一瞬で熱に変換される。

外部から絶え間なく供給される熱で魔道衛星は温まり。

ついには自体が火の玉と化した。

半永久的なループ機構を組み込まれた隕石落下魔法自動詠唱装置メテオインバケットの科学の粋を集めた耐熱装甲に加え、幾重にも施された自己修復魔法。

緻密な計算と先端技術に魔法を加えて実現した軌道維持プログラム。
SSCは灼熱をその身に宿しながら、休むことなく流星を蒐集し続ける。

地球はこの新たな小太陽に炙られて、急速に温暖化ならぬ高熱化していった。

大気は熱風のハリケーンにかき回され、海は蒸発し、陸は熱砂に覆われる。

ほどなく地球は、生命を焼き尽くす死の惑星と化した。

環境の激変で、人々は宇宙開発どころか空すら望めぬ地下深くへと追いやられた。

すべての知恵と労力が、ただ生き延びるために振り絞られた。それでも多くの人々は死に絶え、さらに多くの動植物が絶滅した。

そしてついにデブリが尽きて衛星の表面が多少冷めた頃には、
かつての文明を維持するだけの力は、人類には残されていなかった。

偉大なる科学のわざは喪われ、残ったのは、
おのが肉体に宿る力と、ほんの少しの奇跡。

すなわち剣と魔法。

純然たる力が支配する、
強き者たちの時代が始まった……。

08・近未来ファンタジーのプロローグ（後書き）

いやまあ、SFはさいえんすふぁんたじーの略ですしね…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6322w/>

単品集うそ風味

2011年10月19日02時04分発行